火山がつくった伊東の風景-市民と観光客のための伊豆東部火山群２万5000分の１地質図

Geologic map of the Higashi Izu monogenetic volcano field for tourists and local citizen

小山 真人 [1]
Masato Koyama[1]

[1] 静岡大・防災総合セ
[1] CIREN, Shizuoka Univ.

http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/sbosai/

伊豆東部火山群は，伊豆半島東部～中部に分布する東伊豆単成火山群，ならびに伊豆半島と伊豆大島の間の海底に分布する東伊豆沖海底火山群の総称であり，気象庁が認定する活火山のひとつでもある．陸上部分は，スコリア丘・タフリング・マール・溶岩ドームなどの小火山体から構成され，それにともなう溶岩流・降下火砕物・火砕流・火砕サージ・ラハール堆積物も確認できる．火口の総数は陸上だけで 60 以上におよぶが，そのいくつかは同一噴火割れ目上で同時に噴火した火山であるため，噴火の回数としては 40 程度である．最も古い噴火はおよそ 14 万年前の遠笠山の噴火であり，最新の噴火は 1989 年 7 月に伊東市街の北東 3km の海底で起き，手石海丘を形成した．噴火に至らないマグマ貫入事件も 1978 年以来しばしば起き，それにともなう群発地震と地殻変動が観測されている（小山，2008，火山の事典第 2 版，朝倉書店）．

しかしながら，公的機関の手による伊豆東部火山群のハザードマップはいまだ作成されておらず，減災対策の片輪が抜け落ちた状態が続いている．これは近年に噴火や噴火未遂を経験した日本の火山中で唯一という恥ずべき例である．たとえて言えば，避難地図のないホテルにお客様を泊めているようなものである．このことの原因のひとつは，防災対策そのものが観光に悪影響を与えかねないという，根拠に乏しい認識が地元の有力者の中にあるためと思われる．しかし，そうした認識はあまりに一面的であり，長期的な視点に立てば伊豆東部火山群の噴火は他に代え難い豊かな恵みを地元に与えてきたことは明らかである．こうした表裏一体の関係にある火山のリスクとベネフィットをバランスよくとらえ，火山と末長く共生する地域社会をつくるためには，火山についての正しい知識を自然な形で普及していく必要がある．

こうした問題意識のもとで，演者はこれまで地元での普及啓発活動を続け，火山の恵みを生かした地域振興を呼びかけてきた（たとえば，小山，2001，伊東市史研究，no.1：http://sk01.ed.shizuoka.ac.jp/koyama/public_html/Izu/ItoShishi/ShishiKen1.html，ならびに伊豆新聞の連載記事： http://sk01.ed.shizuoka.ac.jp/koyama/public_html/Izu/Izushin/daichi/daichi.html ）．その結果，最近では一部の行政担当者や市民団体の共感や協力が得られるようになり，火山観光による地域振興の機運が盛り上がってきている．今回紹介する出版物も，そうした流れの中で生まれたものである．

表題の地図は，伊豆東部火山群の地質図をベースマップとし，そこに火山見学のための名所，火山以外の主要な史跡・名勝，道路，ハイキングコース，駐車場，観光施設，トイレなどの情報を盛り込んだものであり，裏の解説面には伊豆半島の地質学的歴史や伊豆東部火山群の噴火史・火山防災などに関する基礎知識の平易な図解を載せている．火山地質図については，早川・小山（1992，火山），小山ほか（1995，火山），古谷野ほか（1996，地学雑誌）のデータを踏襲しつつ，細部については新たに地質調査ならびに空中写真の読図を実施し，噴火年代や地質境界の位置を見直した．降下テフラの等層厚線図については，煩雑さを避けるために主要なもののみを表示した．解説面の構成は以下の通りである：イントロダクション（火山からの贈りもの），伊豆半島のおいたち，伊豆東部火山群，火山がつくった大地，噴火の歴史を読み解く，火山列の意味，火山と共に生きる，伊東は火山の総合展示場（火山名所の詳細解説），伊東へのアクセス，刊行者情報.

地図のサイズはＡ２判をやや縦長としたものであり，伊東市のほぼ全域と伊豆東部火山群（陸上部分）の北東部を収める．両面とも４色カラー印刷であり，背景図には 10 mメッシュの標高データをもとにした地形の陰影図を配した．これを 14 折りとし，噴火位置の時代変遷図をあしらったカラーの紙ケースに入れ，ISBN を取得した上で，通常の書籍流通ルートで販売予定である（「火山がつくった伊東の風景」，2009 年 3 月伊豆新聞本社発行，静岡新聞社発売）．なお，このマップの刊行にあたっては，以下の方々の多大な協力を得た：伊東市観光課，伊東市教育委員会，池観光開発（株），ＮＰＯ法人まちこん伊東，伊豆新聞本社，静岡新聞社，萩原佐知子（株式会社チューブグラフィックス），早川由紀夫（群馬大学），野村正弘（駿河台大学）．この地質図は、文部科学省の平成 20 年度特殊要因経費（政策課題対応経費）「防災教育の地域連携を通した多面的展開と拡充」による成果である。